ヨハネの福音書（54）
「イエスの政治裁判」
ヨハ 18：28～40

1. 文脈の確認
   (4) イエスの受難（18～20 章）
      ①イエスの逮捕（18：1～11）
      ②イエスの宗教裁判（18：12～27）
      ③イエスの政治裁判（18：28～40）

2. 注目すべき点
   (1) 前回は、イエスが主権者であることを学んだ。
   (2) 今回は、イエスが真理の王であることを学ぶ。
   (3) ユダヤ人とローマの権力構造について学ぶ。
   (4) イエスの王国の性質について学ぶ。

人間の悪意でさえも神の計画のために用いられる。
3 組の人々の悪意を通して、神の計画が前進する。

Ⅰ．祭司長たちの偽善（28～32 節）

1. 28 節

Joh 18:28　さて、彼らはイエスをカヤパのもとから総督官邸に連れて行った。明け方のことであった。彼らは、過越の食事が食べられるようにするため、汚れを避けようとして、官邸の中には入らなかった。

(1) 政治裁判が必要だった理由
   ①ユダヤ人が死刑を執行する権利は、数か月前に取り去られていた。
   ②ユダヤ人たちは、イエスに対して冒とく罪で死刑判決を下していた。
   ③しかし、ローマの死刑判決がなければイエスを殺すことはできなかった。
   ④そこで、訴因を冒とく罪から反逆罪に変更して、イエスをローマ法廷に訴えた。

(2) ポンテオ・ピラト
   ①ローマ市民（スペインかイタリア生まれ）
   ②26～36 年にユダヤ総督であった（procurator：ローマ帝国の代官）。
   ③この裁判は 30 年に行われた。総督としての経歴のちょうど中間時点。
   ④残忍な人物として知られていたが、ローマ法の忠実な執行者でもあった。
   ⑤前夜、イエスを逮捕するために一隊の兵士（400～600 人）を派遣していた。

⑥早朝（午前 6 時前）ではあるが、衣服を整え、裁判の準備をしていた。

＊祭司たち（貴族階級）がローマのために実質的にユダヤを管理していた。

＊ピラトは、彼らの要請を無視することができなかった。

(3) 総督官邸

①アントニア要塞の中にあった。

②ユダヤ総督は、通常カイサリアに駐在していた。

③祭りの期間はエルサレムに駐在し、治安維持に当たっていた。

④過越の祭りの期間、ユダヤ人たちは特に興奮状態に陥りやすかった。

＊この祭りのテーマは、「解放」である。

(4) ピラトのもとに来たのは、祭司長たちが中心であった。

①過越の食事は、前夜に終わっていた。

②祭司長たちが食する過越の食事は、朝になってから用意される。

③午前 9 時に、過越の子羊がほふられた。

④祭司長たちは、裁判が終わってから過越の食事をしようとしていた。

⑤異邦人の家に入ることは、儀式的な汚れを受けることを意味した。

⑥祭司長たちの偽善

＊イエスを殺すことは平気であった。

＊儀式的な汚れに関しては、細心の注意を払っていた。

2. 29～30 節

Joh 18:29　それで、ピラトは外に出て、彼らのところに来て言った。「この人に対して何を告発するのか。」

Joh 18:30　彼らは答えた。「この人が悪いことをしていなければ、あなたに引き渡したりはしません。」

(1) ピラトが彼らのところに出て来た。

①ユダヤ人の指導者たちは、建物の中（法廷）には入らなかった。

②ピラトは建物の外に出て来て、彼らと対面した。

③ピラトは、ユダヤ人たちの宗教感情に妥協した。

(2) ピラトの質問

①ピラトは、ローマ法に従って、先ず告発の理由を尋ねた。

②この段階で、ユダが前に出て証言する予定であったが、彼はすでに死んでいた。

(3) 祭司長たちの回答

①具体的な罪状を挙げることができなかった。

＊冒涜罪では通用しない。

＊「悪人」というレッテル貼り

②強引な主張

＊自分たちの裁判は終わった。

＊後は、あなたがそれを承認してくれればいいのだ、という態度。

③ユダヤ人たちは、残忍な性質を持ったピラトを憎んでいた。

(4) 理不尽な裁判だが、神の側からは救いの計画が成就するための必然である。

①「引き渡す」とは、御子が死に渡されることを意味する。

3. 31～32 節

Joh 18:31　そこで、ピラトは言った。「おまえたちがこの人を引き取り、自分たちの律法にしたがってさばくがよい。」ユダヤ人たちは言った。「私たちはだれも死刑にすることが許されていません。」

Joh 18:32　これは、イエスがどのような死に方をするかを示して言われたことばが、成就するためであった。

(1) ピラトの応答

①彼は、ユダヤ人たちが妬みのゆえにイエスを訴えていることを見抜いた。

②彼は、イエスの勝利の入城を知っていた（見ていた）はずである。

③ユダヤ人の宗教に関することは、ユダヤ人の法廷で裁くべきである。

＊これがローマ帝国内で広く行われている習慣であった。

(2) ユダヤ人たちの反論

①「私たちにはだれも死刑にすることが許されてはいません。」

②ユダヤ人から死刑執行の権利が奪われていた。

③ユダヤ人たちは、イエスの死刑をピラトに要求している。

(3) 十字架刑は、イエスのことばの成就である。

①ユダヤ法に基づけば、冒とく罪に対する刑は「石打ち」である。

②ローマ法に基づく死刑は、「十字架刑」となる。

③「二重の責任」（ユダヤ人と異邦人の共謀）が、すべての人類の罪を象徴。

II．ピラトの優柔不断（33～38 節）

1. 33～35 節

Joh 18:33　そこで、ピラトは再び総督官邸に入り、イエスを呼んで言った。「あなたはユダヤ人の王なのか。」

Joh 18:34　イエスは答えられた。「あなたは、そのことを自分で言っているのですか。それともわたしのことを、ほかの人々があなたに話したのですか。」

Joh 18:35　ピラトは答えた。「私はユダヤ人なのか。あなたの同胞と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのだ。あなたは何をしたのか。」

(1) ピラトは建物の中に入り、イエスを個人的に尋問した。

①「あなたは、ユダヤ人の王なのか。」

②これは「あなたはカエサルのライバルなのか」という問いかけである。

(2) イエスは、質問に対して質問で答える。

①「この質問は、自分で考えたものなのか。」

②「あるいは、ほかの人（ユダヤ人）から聞いたのか。」

③ピラトへの普遍的問いかけである。

④ピラトが問われているだけではなく、すべての人間が問われている。

(3) ピラトの答え：「私はユダヤ人なのか」

①皮肉と軽蔑を込めた応答である。

②自分はローマ人なので、誰がメシアかという話題には興味がない。

③もちろん、ユダヤ人から聞いたということ。

④イエスは、ご自分の民から見捨てられ、訴えられたのである。

2. 36～37 節

Joh 18:36　イエスは答えられた。「わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」

Joh 18:37　そこで、ピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたの言うとおりです。わたしは、真理について証しするために生まれ、そのために世に来ました。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」

(1) イエスは、ローマは自分のことを恐れる必要はないと言われた。

①イエスの国は、この世のものではない。

②もしそうなら、弟子たちが自分をユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。

(2) ピラトは、「それでは、あなたは王なのか」と尋ねた。
①「わたしの国」ということばに触発された質問である。

(3) イエスは、自分が王であることを認めた。
①しかし、ローマ帝国のような国の王ではない。
②イエスは、真理の証しをするために人となられた。
＊父なる神、子なる神、聖霊、人間、罪、救いなどに関する真理である。
③真理を愛する者はみな、イエスの声を聞き分ける。

(4) 無千年王国説
①「わたしの国はこの世のものではありません」を根拠に千年王国を否定する。
②「この世のもの」とは、「サタンの支配下にある国」のことである。
③地上での千年王国の成就を否定していることばではない。
④イエスのことばは、神の国の起源の違いを示したものである。

3. 38 節

Joh 18:38　ピラトはイエスに言った。「真理とは何なのか。」／こう言ってから、再びユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私はあの人に何の罪も認めない。

(1)「真理とは何なのか」
①さまざまな解釈が可能であるが、皮肉を込めた応答であることは否定できない。
②ローマの政治家ピラトにとっては現実的意味を持たなかった。
③異邦人の代表であるローマ総督もまた真理を退けた。

(2) ピラトはユダヤ人たちのところに出て行き、イエスには罪がないことを認めた。
①イエスは、過越の子羊として適格であることが、ローマによっても証明された。

Ⅲ. 群衆の倒錯した選択（39～40 節）

1. 39 節

Joh 18:39　過越の祭りでは、だれか一人をおまえたちのために釈放する慣わしがある。おまえたちは、ユダヤ人の王を釈放することを望むか。」

(1) ローマ当局は祭りの緊張を和らげるため、囚人を一人釈放する慣例を設けた。
①ピラトは、イエスを釈放する手段に出た。

2. 40 節

Joh 18:40　すると、彼らは再び大声をあげて、「その人ではなく、バラバを」と言った。バラバ

は強盗であった。

(1) バラバの正体

①「暴動と殺人の罪で投獄されていた」(マコ 15：7、ルカ 23：19)。

②「解放者」として民衆に人気があった可能性が高い。

③「命を奪う者」が釈放され、「命を与える方」が十字架へ。

④人間の価値判断の倒錯が明らかになる。

(2) 贖罪の型

①無実のイエスが罪人の代わりに刑罰を受ける。

②ここに「罪人のために死ぬ子羊」という福音の核心がある。

(3) 群衆の責任と私たちの責任

①すべての人間は「イエスを退け、自分に都合のよいバラバを選ぶ」傾向を持つ。

②その中で神は、罪人の選択を用いて救いを実現された。

③これは終末時代に「偽キリストを受け入れ、真のキリストを拒む」イスラエルの予表でもある。

結論：今日の信者への適用

1. 外側の形式よりも心の清さを重んじること。
   (1) ユダヤ人指導者たちは、汚れないように官邸に入らなかった。
   (2) しかし、その心はすでに不正義に満ち、神の御子を殺そうとしていた。
   (3) 外面的な宗教行為を守っていても、心の中でイエスを退ける危険がある。

2. 神の国の民として生きること。
   (1) 私たちが目指しているのは、神の霊的支配に基づく国である。
   (2) 千年王国は必ず地上に成就する。
   (3) 地上の国でも神の国の民として、別の価値観と忠誠を持って歩むべきである。

3. 相対主義を退け、イエスを真理として受け入れること。
   (1) イエスは「真理について証しするために生まれた」と言われた。
   (2) ピラトは「真理とは何か」と虚無的に問いかけ、すぐに退けてしまった。
   (3) 現代も相対主義が支配している。
   (4) 私たちは「真理はイエスご自身にある」と確信し、その声に聞き従う必要がある。